

Ormondにおける隠蔽と解放

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本合, 陽 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008878

Ormond における隠蔽と解放

本 合 陽

I

The study of concealment is, in all cases, fruitless or hurtfull.

-- Brown, *Ormond*.

Ormond の語り手 Sophia は、作品の題にもなっている登場人物 Ormond を、次のように紹介する。

I know no task more arduous than a just delineation of the character of Ormond. To scrutinize and ascertain our own principles are abundantly difficult. To exhibit those principles to the world with absolute sincerity can scarcely be expected. We are prompted to conceal and to feign by a thousand motives; but truly to portray the motives and relate the actions of another appears utterly impossible. The attempt, however, if made with fidelity and diligence, is not without its use.

To comprehend the whole truth, with regard to the character and conduct of another, may be denied to any human being, but different observers will have, in their pictures, a greater or less portion of this truth. No representation will be wholly false, and some, though not perfectly, may yet be considerably, exempt from error. (92) ¹⁾

長い引用になってしまったが、この作品が現代の読者の目にも興味あるものと映るのは、ここに述べられていることと大いに関係があるだろう。

この作品には "To I. E. Rosenberg" と題する序文があり、その中で語り手ソフィアはこう述べている。ローゼンバーグは、「Constantia Dudley の経歴を知りたがって(3)」、その「動機は重々承知しているし、それ故興味を持つのも当然」である。また彼女は、コンスタンシアのこれまでの人生を、「忠実な伝記作家」として彼に伝えることが、この物語の目的であるとも述べている。このように、作品の視点を設定し、前の引用に述べられている、人間には真実は知りえないとする一種の不可知論を持ち込むことにより、語りの方へと読者の興味は引き付けられる。その中心になるのが、「矛盾し、また不可解に思われる」と序文においてすでに述べられるオーモンドである。上の引用に、「無数の動機によって隠蔽し偽装するよう駆り立てられている(92)」とあった。この「隠蔽する」という語は、物語の冒頭より何度も用いられている。動機を隠すことにより、サスペンスが生じる仕掛けになっている。だがこの「隠蔽」は、ただプロットに寄与するのみではない。オーモンドという人物を謎めかす働きもある。そして、この神秘化によって、一人オーモンドに限らず、この物語自体も謎めいたものに見えてくる。

この作品には、曖昧な点、矛盾する所などが多く存在する。作者 Brown が、この作品執筆に費やした時間は一月もないようだから、²⁾ 不整合な点など十分に見なおしてから出版する時間はなかったのだろう。実際、明らかに作者のミスとしか思えない箇所も多々ある。いくつか例を示そう。ソフィアが、コンスタンシアの情報を、「途絶えることのない手紙のやりとり(22)」から得たと初めのほうで述べているが、後半、語り手ソフィア自身が物語に登場する少し前に、「二人〔ソフィアとコンスタンシア〕が四年前に別れて以来、彼女〔ソフィア〕はこの女性から何の報せも受けていなかった(156)」とあり矛盾している。また、昔、父の経営する商店の使用人であり、後売り上げを横領し逃げていた Craig と思われる人物に、コンスタンシアがオーモンド邸で面会を申し込むとき、それを陰から観察していたクレイグが思ったこと、また彼の言った言葉等は、全知の視点でなければ知り得ないことであり、設定された視点と矛盾する。³⁾

この視点に関しては、ヘンリー・ジェイムズ以降の作家のように、厳密なものとは考えることはできないかもしれない。視点はソフィアに限らないという指摘も何度かなされている。⁴⁾ また、この作品の曖昧さについて、「混乱した記述と、混乱に関わる記述の間に区別がない」⁵⁾ という指摘もある。だが、ブラウンが、ある面で意識的に、ある種の曖昧さをこの作品に持ち込んでいるのは

事実である。それ故、十分な時間をかけてない駄作であると決め付けてしまうには、この作品の持つ魅力はあまりに大きい。これまでから様々な解釈が生み出されているのも、その証であろう。

この曖昧性をめぐる議論の中で、二つの対立する要素を作家の想像力の問題と考え、そこに、ブラウンの「自意識」を見いだす議論があることは、ここで紹介する価値がある。⁶⁾ ブラウンは、現在ではフィクションであると考えられている Henrietta G. にあてて書いた手紙に、次のように書いている。

I think it may safely be asserted that of all the virtues mankind is most universally deficient in sincerity,... How many motives are there for concealing our real sentiment, for counterfeiting approbation and conviction? And how many occasions are there, on which, if its immediate and temporary effects only be considered, sincerity is criminal, and when a strict adherence to it would be, not only an infraction of politeness but a deviation from rectitude? ⁷⁾

真摯であることはいかに難しいかが、ここで説かれている。「多くの動機によって、本当の感情は隠蔽される」のであり、冒頭にかかげたソフィアの言葉と重なってくる。ブラウンは、先行する作品のエピソードやモチーフを、後の作品に使っているとの指摘もある。⁸⁾ しかし、「真摯であること」と「隠蔽」との間に横たわる溝に、彼が意識しないではいられなかったことは事実なのだ。つまり、発表の意図もない習作の段階から尾を引いている主題なのであり、ならば彼の創作の動機とも不可分であると言ってもいいだろう。さらに、彼がこの「隠蔽」に、こだわらないではいられない事情もあったと考えていいのではないか。

ブラウンには、法律を学びながらも作家を目指していた時期、大きな影響を与えてくれた友人が二人いたが、不幸なことに二人とも若死にしている。その一人、Elihu Hubbard Smith は、Dr. Benjamin Rush のもとで医学をおさめていた。ラッシュは、女性の教育に関心を持っていて、当時 Mary Wollstonecraft に負けないほどの論戦をはっていた。スミスはその影響もあり、William Godwin らを含む当時の進歩思想に傾倒していて、⁹⁾ Rousseau にかぶれていたブラウンを、ゴドウィンやウルストンクラフトへと向かわせた

のである。またブラウンの処女出版作となった *Alcuin*, part I, II の出版を手懸けもした。¹⁰⁾

ブラウンは、時々憂鬱症にかられたらしいが、落ち込んでいるブラウンに、1796年5月7日、スミスは次の引用を含む長い手紙を書き送っている。

You know too that *real friends* alone have the courage to point out the faults of others boldly to themselves.... You are well aware of the value of sincerity;...

This is a solemn strain, you will say, a melancholy and grave preface. It is--and indeed, my Charles, the occasion requires it. Why do you so much delight in mystery? Is it the disease of will? or of habit? Do you, of choice, give to the simplest circumstances the air of fiction or have you been so long accustomed to deal in visionary scenes, to intertwine the real with the imaginary, and to enwrap yourself in the mantle of ambiguous seeming, that your pen involuntarily borrows the phraseology of fancy, and by the spell of magic words still diffuses round you the mist of obscuring uncertainty? The man of Truth, Charles! the pupil of Reason has no mysteries. He knows that former errors do not constitute him guilty now; he has nothing to conceal. He seeks only to know his duty and perform it, and he has no occasion for disguise....¹¹⁾

この真摯な愛情あふれる手紙に、ブラウンが即座に書き送った返事は失われて今はない。しかし、それに答えて、スミスが出した返事の草稿から判断すれば、ブラウンの返答が、スミスの求めるような明快なものでなかったことは明らかだろう。¹²⁾

ブラウンは、友人スミスに、一体何を「隠蔽」しようとしていたのか。そして、彼の実生活にまで根をおろしていた「隠蔽」を主題に持つ『オーモンド』で、ブラウンは何を描こうとしていたのだろうか。ブラウンが小説を発表していた時期、小説を読むことは、特に女性にとって墮落であるという論議が盛んであった。¹³⁾ そのような時代に、小説、しかも女性の誘惑の主題を扱う作品を描くのであれば、Michael David Bellのように、「ブラウンを魅力的にしてい

るのは、お決まりの虚構の恐怖を、虚構作品の中心的関心事とする彼の自意識である。」¹⁴⁾ という側面から論じることも可能だろう。しかしそこには個人的な事情に関わる問題が隠されてはいないか。ブラウンは、スミスの影響でゴドウィン、ウルストンクラフト等の思想に傾倒していったが、心の底では信じきれず、『オーモンド』では、結局女としての逃れられない宿命を描き、最終的にはルソーに戻っていった。このように考える Robert Rigby Hare に従えば、¹⁵⁾ 所詮スミスとは思想的に相容れることはなく、それ故スミスの忠告がいかに真摯であろうと本心からは応えることはできず、当然彼は自分の心情を「隠蔽」しないではいられなかったと考えることもできる。しかしブラウンが「ヘンリエッタとの手紙」を構想していた時期は、クラークによれば1790年から1793年であるらしく、¹⁶⁾ 引用したスミスの手紙が書かれた時期からすれば、3年以上も前のことになるし、さらに、ブラウンが『オーモンド』を執筆したのはスミスの死後であるから、すでにいない友人との思想の違いをわざわざ隠蔽してみせる必要があったとも思えない。思想の問題とは別の所に、何か潜んでいると考えるほうがいいだろう。

私はこの論文で、ブラウンの「隠蔽」が、作品の中でどのような位置付けを与えられており、何を「隠蔽」しようとしているのかを探ってみたいと思っている。

II

The theme of the novel (deception)
is also the form of the novel
(narrative unreliability).

-- James R. Russo

この作品で、まず注目される人物は、序文で「矛盾し難解な存在(3)」と述べられるオーモンドであろう。そして、彼の哲学的発言と、ソフィアによる人物紹介、分析とをあわせると、ソフィアでなくても、「一貫した語りから生じる利点はほとんどない(3)」と、開き直りたくなるのも無理はない。¹⁷⁾ しかし、ここで注目すべきなのは、オーモンドについて述べる際、次のようにあることだ。

That in which he chiefly placed his boast was his sincerity. To

this he refused no sacrifice. In consequence of this, his deportment was disgusting to weak minds, by a certain air of ferocity and haughty negligence. He was without the attractions of candor, because he regarded not the happiness of others but in subservience to his sincerity. Hence it was natural to suppose that the character of this man was easily understood. He affected to conceal nothing. (94)

これまで述べてきた「真摯さ」と「隠蔽」の主題が、ここでも繰り返されている。そして、ソフィアによって「矛盾し難解な存在」と定義されるオーモンド自身が、自分は「真摯」であると述べている。このように、オーモンドをめぐる記述をみていくと、矛盾し錯綜した出口の無い世界に入ってしまう。それ故、コンスタンシアの「伝記」であるというソフィアの言葉をとにかく信じることにしよう。コンスタンシアをめぐる物語において、彼がどのような役割を担っているか、彼の矛盾、錯綜はいかなるものであるか。そのためには、まず一番の問題となる、三つの殺人について考えねばならない。

オーモンドがコンスタンシアに惹かれていくのを知り、愛人 Helena が自殺したあと、コンスタンシアは、Martinette (以前、Ursula Monroe として登場していて、後にオーモンドの妹と判明する人物) や、公然と近づいてくるようになったオーモンドとの交際から様々なことを学び、「オーモンドの物語 (narratives) は彼女 [コンスタンシア] をミシシッピ河を越え、シベリアの砂漠へと連れていった。(中略) 彼女の新しい友達 [マーティネット] は、彼女を文明世界へと連れ戻し、残り半分の人種を描きだした。野蛮と洗練の二つの様式にある人間をこれら観察者は吟味し、一方の描写で足りない分はもう一方がたっぷりと補った。」(170) のだ。ここに来て、オーモンドのコンスタンシアへの影響は相当なものとなる。ちょうどその頃、父グドリー氏は、若かった頃彼の心を引き付けて離さなかったヨーロッパへと、娘と共にわたることを計画する。しかし「それは彼女に新しい知識への道を開くだろうし、オーモンドの忌まわしい追跡から彼女を引き離してくれるだろう」(174) という目的にもかなうものなのである。コンスタンシアは迷ったあげく、離れ離れになっていた旧友ソフィアとの再会を思い、父の提案に同意する決心がつく。そして次の朝、その決意を告げに父の寝室へと向かうが、父は死んでいた。

この場面を描写するソフィアは、多分に感傷的で、コンスタンシアの逃れら

れない「宿命」が強調される。この殺人の顛末は、後にオーモンドによって説明される。「あなたを貧困から救い、あなたの父の視力を取り戻してあげたのも (231)」、彼女に対する「愛」のためであったのだ。ところが、愛の成就の障害となったためダドリー氏を殺害した。しかし、それも迫りくる様々な苦しみから彼を解き放つ「善意」からのことなのだ。それ故、自分の罪（ダドリー氏の財産横領の罪）の露見を恐れるクレイグを焚き付けて、氏を殺害させたのである。

オーモンドは、「女性との交際において、自分が愛と呼ばれるものに魅惑されることなどありえないと思っていた (97)」とあるように、結婚を否定し、恋愛感情などに左右されないと述べられている。だが、「一人の女の愛情 (231)」のために殺害まで考えてしまうのである。つまり、オーモンドの思想的―貫性から生じる人物設定に目をつぶるのであれば、この動機説明は、十分に納得できるものではない。それに、そもそも「善意」による殺人というのも納得できない。また、知識を広げるという点に関し、まるでダドリー氏とオーモンドはコンスタンシアを奪い合っているかのようだ。

第二の殺害は、オーモンドによるクレイグ殺害である。父が死に、駆け付けてくれたソフィアとヨーロッパに旅立つ前、田舎の屋敷（もともとはダドリー氏のものであったが、事業に失敗して手放し、後、オーモンドがヘレナに買い与え、ヘレナの死後コンスタンシアのものとなっていた）に一人でいると、突然彼女の前に現われたオーモンドは、怯える彼女の前に、「血のあとも傷痕もない (226)」、「埃にまみれた」クレイグの死体を引きずってくる。説明を求めるコンスタンシアに、「オーモンドは、自分自身とあなたのために復讐するものであると言わなかったか。あなたにとっても私にとっても彼は泥棒だ。(230)」と言う。

クレイグは、「幼い頃より悪知恵と略奪になれ親しんだ男 (230)」であり、「極度の貧困、迫害の恐怖、絞首台で死ぬ恐怖に急き立てられれば、殺人をも辞さないのではないか」とオーモンドは言う。しかし、父の敵ということで、コンスタンシアが復讐するのは納得できるとしても、オーモンドにとって、復讐とは一体何を意味するのだろうか。その点に関して、テキストからは何も情報を得ることができない。クレイグを焚き付けてダドリー氏殺人に向かわせた張本人がオーモンドなのである。その彼にとっても復讐であるのならば、オーモンドが、愛する女性と同化し、彼女になりかわって復讐したとしか、考えようがない。「あなたのためになら、彼〔クレイグ〕の命を奪ってもいいと思え

るほどの恩恵を私はあなたからもらってきただろうか (230)」と言うオーモンドに、コンスタンシアは「私からどんな恩恵を受けていようと、それによってこんな行為が正当化されることはない」と即座に否定していて、この殺人を正当化する動機は、少なくとも彼女の側にはない。とすれば、彼に殺人を正当化してくれる動機は、彼の頭の中にしかないことになる。もしも別の動機を考えるとすれば、ダドリー氏殺害の罪の、贖罪とでも考えるしかないのだろうが、それを暗示する言葉は見つからない。¹⁸⁾ また、この殺害に関し、慣用的な表現とはいえ、「血をもって罪の贖いをさせる (230)」とあるが、死体には「血のあともしも傷痕もなかった」のであるから、ほんの数ページしか離れていない記述にしては、説得力に欠ける。¹⁹⁾ オーモンドの偽装や、コンスタンシアの家のなかの情報を得る手口に関し、それなりの説明があることと比べれば、この記述は随分と謎めいている。

第三の殺人は、コンスタンシアによるオーモンド殺害である。第28章、最後にコンスタンシアに会いにきたオーモンドは、クレイグの遺体を投げ出し、殺害の動機を説明したあと、「あなたは私が二枚舌だと責め、私の行いがおろかな、もしくは犯罪的なものだと思う。私は隠蔽する理由を述べてきた。だがそれでもあなたは納得しなかったようだ。さあ、これで疑いも晴れるだろう。あらゆる曖昧さは消えるだろう。(227)」と述べ、障害となるダドリー氏殺害を教唆し、共通の敵(?)となったクレイグに復讐するまで至ったのは、「愛ゆえだった」と説明する。しかし彼女がこれを理解しようとしなかったのを見て取ると、彼女の殺害もしくは強姦、ついには死姦さえをもほのめかす。「曖昧さ」が消えると、彼は単なる暴行魔にすぎなかったというのか。²⁰⁾

"Ah, Constantia, this indeed, is merely prelude to a scene that is to terminate my influence over thy fate. When this is past I have sworn to part with thee forever. Art thou still dubious of my purpose? Art thou not a woman? And have I not entreated for thy love and been rejected?

"Canst thou imagine that I aim at thy life? My avowals of love were sincere; my passion was vehement and undisguised. It gave dignity and value to a gift in thy power, as a woman, to bestow. This has been denied. That gift has lost none of its value in my eyes. What thou refusedst to bestow it is in my power

to extort. I came for that end. When this end is accomplished, I will restore thee to liberty.” (233)

彼の「真摯な」愛の情熱によって「威厳と価値を」もっていた「女として与えることができる贈り物」——つまり彼女の体——は、今だに価値がある。彼女が拒否しようが奪い去ると彼は言うのである。手にもっていた「懐刀 (a pen-knife)」で彼と対決しようにも、「彼女の武器は弱々しい手から容易にもぎ取られるであろう (234)」。それ故、彼女は自害を決意する。しかし、彼は「命より想像上の名誉」を重んじる彼女の行為を嘲笑い、「自殺の罪を背負い、臆病者と記憶に烙印を押され死ぬか、いつまでも至福を感じ称賛されて生きるか。どちらかを選びなさい。(中略) 生きていようと死んでいようと、私の目にうつる獲物は私のものだ。(235)」と、彼女が自殺した後でも、彼女の肉体をものにするには変わりがないと言わんばかりの言葉を口にする。ここまでくれば、彼の「真摯な」愛情とは単なる肉欲と支配欲にすぎない。²⁰⁾

ソフィアに救けだされてから、懐刀で「やけくそにめったやたらに (240)」切りつけ、それがオーモンドの心臓を貫き、彼が死んでしまった経緯が語られる。だが、前に述べたように、狂人と化しているとしか思えないオーモンドを、果たして「弱々しい手」によって殺害することは可能だろうか。死ぬ直前、「彼はひどく咎めるような顔つきをしてみせたが、何もしゃべりはしなかった」。この記述に、彼の狂気は感じられない。むしろ、死ぬべくして死んでいったという印象を受ける。

さて、長々と三つの殺人をめぐる述べてきたが、これら殺人の個々の動機および方法に関し、十分に納得のいく説明が、ソフィア、ひいては作者によって与えられていないことが確認できたはずだ。「理性的」であると再三述べられ、「女の愚かさ (106)」故にヘレナを馬鹿にしていたオーモンドが、コンスタンシアと出会い、彼女は「女性には持ち得ないと思っていた精神構造 (moral constitution) の証」を持つとわかり、「女性の中傷者から熱烈な賛美者に突然変わり (131)」、ところがその愛が報いられないとわかると、一転して強姦魔に変身するというのでは、メイル・ショウピニストの末路を暗示するカリカチュアと考えることはできても、それ以外に、彼の「理性」と狂気の間の溝をうめる説明を見い出すのは難しい。しいて言えば、オーモンドが、コンスタンシアになりかわり、善意で彼女の父を殺害させ、犯人を自らの手で処罰し、それらの罰として自らの死を甘んじて受け入れた、という筋書きが浮かび

上がる。

しかし、動機および方法が明確にされないのならば、この三つの殺人事件が起こったという事実のほうが重要であったのだと仮定することはできる。そのことに関連すると思われるので、オーモンドが結果としてコンスタンシアに貢献した、彼女の財産の行方について触れておこう。

グドリー氏の財産は、クレイグの詐欺によって奪われることになるが、それを結果としてコンスタンシアの手に戻してやる役割を果たすのがオーモンドなのである。オーモンドは、ヘレナと愛人の関係を持つにあたって、その「契約の条項に（143）」、「自発的に」、「この町の一軒の家と家具の独占権」を与え、さらには、Perth-Amboy の近くの田舎の隠居所（後、クレイグとオーモンドの殺害が行なわれることになった所）をも買い与えてやったのであった。これらがもとはグドリー氏の所有物であり、彼が自ら施した調度もてつかずのままオーモンドの、さらにはヘレナの所有するところとなったのだ。そして、この二つの家は、ヘレナの死後、彼女の遺言で、親しい友人となっていたコンスタンシアに譲られたのである（144）。つまり、殺人は、

グドリー氏 ←（クレイグ）← オーモンド ← コンスタンシア

の順になっており、財産は、

グドリー氏 →（ある人）→ オーモンド →（ヘレナ）→ コンスタンシア

の順で動いている。殺人の動機、方法が明確でないのと同様、この財産の動きに関しても、かなり無理な設定であると思われる。ならば、ここでも、財産がコンスタンシアの手に渡ることが問題であったと仮定できるだろう。

コンスタンシアは、ソフィアによると、「おそらく他の人だったら、彼女の父の存在はただ障害と困惑を生み出すもとであったにすぎず、これまでも自分の知恵で生きてきたのだから、これから自分で道を選び行動するのに何ら困難も障害もないと思っただろう（178）」が、実際には、「父の存在は彼女の存在と入り交じっているように思え」、父の死によって、「彼女の存在の虚しさと侘しさが、堪え難いほどに膨らんだ」と言えるほど、父に精神的に負ぶさっていたのだとされる。ところが、またソフィアによると、コンスタンシアは「不屈の精神」を持つと繰り返され、色々と悩むことはあっても、一旦心を決める

と迷うことなく行動する女性として、終始一貫描かれている。ここに、矛盾はないだろうか。

この作品で、「結婚」の主題は様々な形で提出され、また議論されているが、コンスタンシアに関して見てみると次のようになる。不幸が一家を襲う前、「結婚とは永遠の愛情と服従の誓いを含む。それは一生続く誓約である。双方の人格がわかり形成されるに十分な時間もかけず、あまりに若く結婚し結ばれることは、向こうみずの証にすぎず、有害で恥曝しである。(18)」と彼女は考えていて、当時好意を持っていた若者が同じ考えでないことを知り、親に反対されたこともあって、結婚をあきらめている。母の死後、彼女は父の「慰め手(17)」の役を引き継ぐことになる。ところが、彼女の母が経済的には夫に庇護されつつその役を演じていたのとは違い、彼女の場合経済的な意味も有する。そこで彼女は、親の「偏見(21)」を退け、「働く女性」となることを選ぶ。貧困に喘ぐ時期、偶然知合った男が求婚してくる。彼は謹厳実直な人物で、生活にも困っていない。しかし彼は、彼女の「時間と金と労力の見事な節約(68)」が、「妻に備わっているべき資質」である点のみを評価し、彼女の知性や精神性など問題としない。彼女には、「妻は結婚すれば豊かになるのはわかるが、この人との場合、結婚に付随する条件はなんと屈辱的なことか(69)」としか思えない。「娘の稼ぎで暮らすことに耐えられない(70)」という「男としての」欠点を持つダドリー氏に、「結婚の誓いなど形式だけで意味などない(70)」のだから結婚してしまうほうがいいとすすめられる。しかし彼女は、「他人の所有物」になり、「個人の自由」を奪われるくらいなら、「少なくとも自分自身の労働によって」生きていくほうが潔いと考え、父に逆らい、男の申し出を断る。彼女の結婚観は、この時点でもかなり自覚的なものへと変化しているが、さらに、「家財道具を選ぶように妻を選ぶ(104)」従来の結婚観に照らせば進歩的なオーモンドの考えにも刺激され、結婚における両性の「平等(129)」を強く確信するにいたる。²⁾

コンスタンシアは、母の死後、ダドリー氏が「墮落した欲望にとらわれ、下品にも酒色に耽り、酔いが与える幸福にしがみつき(22)」、「酔って発作をおこし大騒ぎし、暴力をふるい、卑劣な恥辱の胸はりさけるような場面」を演じた際も、「慰め手」として堪え忍んだわけだが、そのコンスタンシア像と、今述べてきたような結婚観を形成し、オーモンドに「女性には持てるはずのないと思っていた精神構造の証」を認められる女性像とに、十分な整合性は認められない。むしろ、「このような者[コンスタンシア]が父の奉公人のレベルに

まで身を落とし、自分の名誉をそのような哀れな男のために犠牲にするなどありえようか(112)」というオーモンドの言葉を信じたくなる。父を捨てられない「天使のような慰め手(50)」としての側面と、父ゆずりの「知識欲」と向上心という側面が、対立しているとしか言いようがないのだ。

「革命期の作家は、父権的支配に対置し、社会的政治的関係の共和国的雛型として、愛し合う男女の関係を持ちあげた」³⁰⁾と考える者もあるが、当時の状況が、劇的に変化し、旧弊な因習がなくなったとは思えない。男女関係の新しい雛型は提出されたかもしれないが、女性の所有していた財産も結婚してしまえば全て夫の管理するものとなり、妻の権利は失われ、「妻の財産を夫が支配する力は『結婚による家族の強い絆』である」とさえ考えられていた。また、娘は父の所有物であると思われていて、故に「共和国の理論家」にとっても、娘が家族の意向に従わなかったり、妻が夫に逆らうことは「不自然」であったのだ。³⁰⁾ 実際、この作品にも、貧困の時期、コンスタンシア達の家主であった男が死に、彼の財産である家作は、財産復帰権(reversion)によって、未亡人ではなく甥のものとなったという記述がある(41)。また、コンスタンシアが、一時期非常に親しくするマーティネットの父の死に際して、「父が死んでうれしい。父の悲しみはこれで終わりになるのだから(173)」ともある。この作品は、コンスタンシアの視点はほとんど入りこまないため、彼女の真意をつかむことは不可能だが、今述べた時代背景や作品に書き込まれている記述を考えれば、彼女は父の「慰め手」であることに、ソフィアが語るように満足していたとは思えなくなる。彼女は父からの解放を願ってはいなかっただろうか。

殺人、財産といったコンスタンシアをめぐる様々な問題には、矛盾、対立がつきまとう。しかし矛盾、対立はこの作品の構造であると言うことすらできる。「人間の心においてあらゆるものは進歩する(121)」という考えや、知識の広がり肯定する考えに支えられ、コンスタンシアの世界が広がっていくという教養小説的側面と、「不吉な宿命があなたの人生が終わるまでつきまとうだろう(30)」と父が、また同様の予言をオーモンドも述べる(214-5)コンスタンシアをめぐる宿命論。このように、対立し矛盾する要素は、ソフィアの語りにつきまといるのである。そして、そのソフィアは、冒頭序文からオーモンドの「矛盾し不可解な存在」であることを、「一貫した意図から生じる利点をほとんど持たない(3)」ことを強調し、読者の興味を、オーモンドという人物の「謎」へ引き付けようとしているようだ。つまり、この作品において、コンスタンシアの存在の二重性は、ソフィアの語りによって増幅され、矯正され、

オーモンドという不可思議な存在の中に吸収されていくように、作品が構成されていると言える。

長々と分析を行ってきたが、それによって、語りに内在する対立、矛盾は、ダドリー氏の死と、コンスタンシアの財産相続という単純な事実をわかりにくくする効果があることがわかるだろう。最終章、コンスタンシアを救いにきたソフィアの耳にした言葉は、「私はこの忌まわしい牢獄から解放されることはないのか？(238)」というコンスタンシアの言葉だった。これは、コンスタンシアの手によるオーモンド殺害の直前の場面であるが、彼女は「ある悪魔が扉を閉鎖してしまった」ので、「閉じこめられてしまった(imprisoned)」のだという。彼女はこの場面となる田舎の避難所へ、「父の努力と工夫の結実を、よその情け容赦のない人の手に引き渡すことは、罰あたりなことだと思った(220)」ために、一人やってきて、そこでオーモンドと対決することになったのである。ならば、「ある悪魔」と、作者が彼女に叫ばせる意図は明らかだろう。

コンスタンシアの人生を考えてみると、自分の意志を通すべきところは通しながらも、父が酒に酔い暴力をふるうのにも「天使のような慰め手」として対応し、やっとその役から解放されると、今度はオーモンドにつきまとわれ、強姦までされそうになる。この彼女の人生を時代背景に照らして考えれば、彼女にとっての「牢獄」とは、父であり、オーモンドであったはずだ。そして、結果として、彼女はその牢獄から逃れ、財産も手に入れるという大団円を迎えるのである。このような結末を願っていたという彼女の心理は描かれていないが、しかし彼女の物語は力強くその方向を目指し進んでいく。

III

You have been a witness.

-- Brown, *Ormond*

『オーモンド』を論じる際、主題の共通する *Alcuin* への言及は多い。しかし十分な論議がなされているとは言えない。多くは、アルクインと Mrs. Carter の論戦と考え、カーター夫人の進歩思想に潜む保守性を指摘するものである。²⁹⁾ それに対し、対話形式の導入によって、表明される思想が議論され深められるというより、むしろ彼の真意がつかめなくなっているという指摘があるが、³⁰⁾ そのほうが私の考えに近い。『アルクイン』で、「私は講師は嫌い。(中

略)同様論議も嫌い。」それ故「対話(conversation)」がいいと、わざわざアルクインに言わせた上で、ブラウンは対話形式を用い記述している。対話をする二人それぞれに、革新性と保守性を持たせ、それぞれが相手の保守性を攻撃する形式なのだ。それ故、読者はそれぞれの人物に感情移入して読むため、結果として、それぞれの人物にそってしかこの作品を読めなくなる。だが、人物の枠を外せば、この作品は、実は当時の進歩思想の紹介にすぎないと言っても過言ではない。私には、『オーモンド』におけるコンスタンシアの解放の物語と、この『アルクイン』の構造が同一であると思えてならない。

Paul Witherington が、*Wieland* について論じながら、次のように述べている。

It may be argued that Clara and Edgar are personae, not mouth-pieces for Brown himself, and perhaps this is true at the outset of each novel. But as the "invasions" of complexity are repelled, so the distance shrinks between author and character, indicating that Brown began to regard the mask of fiction itself as an invasion. (178)

Mimicry, Carwin's other talent, represents the artist's ability to copy reality. Together--Carwin never separates them--they form the artist's paradox of distance (the "thrown" voice) and involvement (mimesis).²⁷⁾

彼の引き出す結論に異論はあるが、²⁸⁾ここに述べられている作者と登場人物の「距離」、「距離と感情移入の矛盾」に注目したい。『アルクイン』を、作者の対話を好むという言葉に惑わされず、個々の人物に同化することなく読めば、当時の進歩思想の紹介と読めると述べた。つまり、作者は、「対話」という虚構化の装置を持ち込むことによって、彼個人がひとつの思想に肩入れすることなく、様々な思想を紹介してみせたことになり、思想の紹介という観点に立てば、ブラウンは作品と十分に「距離」をとっていると言えるのだ。同様『オーモンド』は、財産は確保したうえで父や男の支配から自由になるコンスタンシアの物語であると仮定すれば、作者はその物語を十分に描ききっている。²⁹⁾そして、この作品を振り返って眺めれば、コンスタンシアが父から自由になると

いう事実は、オーモンドによって、ソフィアの語りによって隠し続けられてきたことになる。これこそが、冒頭に論じた「隠蔽」であると言えるだろう。

『ウィーランド』の終盤、語り手 Clara の兄 Wieland は、悲劇の最後を遂げる少し前、この物語の「悪役」たる腹話術師 Carwin のことをさして妹に、「あの不幸な男に対しても公正でなければいけない。あの男の媒介としての仕事は終わった。(The instrument has done its work.)」³⁰⁾と述べている。カーウィン同様、オーモンドも「媒介」として機能してはいないか。つまり、オーモンドをこの物語に持ち込むことで、コンスタンシアの解放の物語が、父の復讐の物語という「偽装」のもと「隠蔽」されて提出されたと、考えることができるのだ。³¹⁾

ブラウンのよく知られた言葉、「物語作者である道德家にとって、合衆国は新しくまだ踏み固められていない土地である。」を含む、習作 *Skywalk* への公告の中に、ブラウンのフィクションにたいする考えが見られる。

The popular tales have merit, but there is one thing in which they are deficient. They are generally adapted to one class of readers only.... The world is governed not by the simplton, but by the man of soaring passions and intellectual energy.... A contexture of facts capable of suspending the faculties of every soul in curiosity may be joined with depth of views into human nature and all the subtleties of reasoning....³²⁾

コンスタンシアの解放という「事実」が、それを隠蔽しようとして働く人間の心を照らしだすことをも意味すると考えるのはうがちすぎか。こう考えると、この作品の副題 "The Secret Witness" も、作品の視点からはうかがい知ることのない秘密をのぞく読者を意味するかもしれない。

物語を、「明快さと作法へと」向かう「^{フレイブル}話の提示のプロセス」と、「秘密へ、秘密を隠蔽する歪曲へと」向かう「話の漸進的解釈のプロセス」という「二つのからみ合ったプロセスの所産」と考えてもいいと、フランク・カーモウドは記している。³³⁾ それにならえば、ブラウンは「オープン」な「話の提示」であるコンスタンシアの解放というストーリーを語る際、意識的に「隠蔽」することで、二つのプロセスの断絶を示したことになる。この意識的なストーリー

と語りの断絶に、ブラウンの秘めたる強烈なメッセージを私は感じないではない。

そのメッセージとは何だったのだろうか。ブラウンは、何故コンスタンシアの解放の物語を「隠蔽」したうえで提出したのか。まだまだ疑問は残っている。コンスタンシアとソフィア間の同性愛的友情を指摘したのは Leslie A. Fiedler であるが、³⁴⁾ 実はブラウン自身、同性愛の問題で悩んでいたのかもしれないのだ。作家として立つ前、法律の勉強をしていたが、彼はどうしても打ち込むことができず、しかもそれを家族にも友人にも理解されないという状況にあったとき、親友の Wilkins にあてて書いた手紙にある一節は、何を意味するのだろうか。

In the soft bosom of domestic peace, in the worship of the household deities, true wisdom and genuine piety consist. A wife and children, though my destiny deny me those inestimable blessings, may they be the portion of my friend. Friendship cannot form a more affectionate wish.³⁵⁾

ブラウンが、後結婚することになる女性 Elizabeth Lynn と出会ったのは 1800 年 11 月であり、1804 年に結婚している。³⁶⁾ そして、ブラウンが小説家として最後の作品となった *Jane Talbot* を出版したのが 1801 年 12 月のこと。未完の *Carwin, the Biloquist* も 1803 から 1805 に雑誌掲載している。小説家として筆を折った時期が、ちょうど恋愛、結婚の時期と重なっていることになる。現時点でこのことを十分に論じる準備はないが、ブラウンが、コンスタンシアの解放の物語を、「隠蔽」して描かないではいられなかった背景には、以上のような事情があったように思えてならない。

註

- (1) テキストには Ernest Marchand の編集による Charles Brockden Brown, *Ormond* (New York and London: Hafner, 1937) を用いた。この作品からの引用は、全てこの版による。
- (2) Sydney J. Krause, "Ormond: How Rapidly and How Well 'Composed, Arranged and Delivered,'" *Early American Literature*, 13 (1978-79), p.240.

- (3) これに対し、James R. Russo は、コンスタンシアとクレイグが恋人だったと考えており、それが正しければ、コンスタンシア経由で情報が入ったことになる。彼の説は非常に刺激的である。ブラウンの「視点、スタイル、試み」にもっと注目すべきだという Paul Witherington の言葉を受け、ブラウンが故意に「信頼できない語り」を用い、「半ば本当のような嘘の豊かな生地に、真実をばかした」ことを証明しようとするものである。ただし、彼の論証は力業にすぎないくらいがあり、また納得できない箇所も多々あるのも事実である。(James R. Russo, "The Tangled Web of Deception and Imposture in Charles Brockden Brown's *Ormond*," *Early American Literature*, 14 (1979), pp.205-27.) また、この作品の欠陥については、Krause, "*Ormond*," pp.144-7; Paul C. Rodgers Jr., "Brown's *Ormond*: The Fruits of Improvisation," *American Quarterly*, 26 (1974), p.18 等を参照のこと。
- (4) Russel B. Nye, "Historical Essay," in Charles Brockden Brown, *Ormond, or the Secret Witness* (Kent State University Press, 1982), p.313; Paul Witherington, "Benevolence and the 'Utmost Stretch': Charles Brockden Brown's Narrative Dilemma," *Criticism*, 14 (1972), p.176; William Hedges, "Charles Brockden Brown and the Culture of Contradictions," *Early American Literature*, 9 (1974), pp.107-42 等。
- (5) Witherington, "Benevolence," p.177.
- (6) ブラウンの "narrative method" には一貫性があり、"the satiric Manichaen mock-heroic" が彼の語りの特徴であると考え、その結果、曖昧さの仕掛けにより、哲学的熱狂者の狭くて抑圧的な感性の起訴状になると考える Carl W. Nelson (Carl W. Nelson, "Brown's Manichaean Mock-Heroic: The Ironic Self in a Hyperbolic World," *West Virginia Univ. Philological Papers*, 20 (1973), pp.27-8; "A Just Reading of Charles Brockden Brown's *Ormond*," *Early American Literature*, p.8 (1973), 170.) や、芸術、想像力といった作家としてのブラウンの問題と、宗教上などのモラリストとしての問題を、共に全能の視点を持つオーモンドとソフィアに重ね合わせ、その葛藤を描く作品であるとする Witherington、「隠蔽」という言葉に注目しつつ論じる Bell (Michael Davitt Bell, "'The Double-Tongued Deceiver': Sincerity and Duplicity in the Novels of Charles Brockden Brown," *Early American Literature*, 9 (1974), pp.143-52; *The Development of American romance: The Sacrifice of Relation* (Chicago and London: U. of

Chicago P., 1980), pp.52-61)。この二人は、この葛藤のなかに、ブラウンの「自意識」を見だし、それをアメリカ文学の特徴と結びつけていく点興味深い。なお、彼らの論文から大いに啓発されたことを記しておかねばならない。また、W. B. Berthoff, "'A Lesson on Concealment': Brockden Brown's Method in Fiction," *Philological Quarterly*, 37, No. 1 (January 1958), pp.45-57からも学ぶところが多かったことを記しておく。

- (7) David Lee Clark, *Charles Brockden Brown: Pioneer Voice of America* (New York: AMS, 1966), p.102.
- (8) 例えば Robert Rigby Hare, "Charles Brockden Brown's *Ormond*: The Influence of Rousseau, Godwin, and Mary Wollstonecraft," Diss. U. of Maryland, 1967, pp.32-3. 彼の論文は、三人の思想家の影響を丹念に読み込んだ労作で、私も少なからず恩恵をこうむっている。
- (9) この辺りの事情については Harry R. Warfel, *Charles Brockden Brown: American Gothic Novelist*, (Gainesville: U. of Florida P., 1949), p.42; Linda K. Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (Chapel Hill, V.: U. of North Carolina P., 1980), pp.210-21参照。
- (10) Charles Brockden Brown, *Alcuin: A Dialogue and Memoirs of Stephen Calvert* (Kent State University Press, 1987).
- (11) Warfel, p.58.
- (12) Ibid., pp.60-1.
- (13) Cathy N. Davidson, *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America* (New York; Oxford: Oxford U.P., 1986), pp.45-7; Herbert Ross Brown, *The Sentimental Novel in America 1789-1860* (New York: Pageant Books, 1959), pp.4-8参照。
- (14) Bell, "'The Double-Tongued Deceiver,'" p.151.
- (15) Hare, pp.243-6.
- (16) Clark, p.54.
- (17) ここで私は、オーモンドの思想の分析および、思想的背景については考察しない。これらに関しては、前出の Hare ならびに Robert S. Levine, *Conspiracy and Romance: Studies in Brockden Brown, Cooper, Hawthorne, and Melville* (Cambridge: Cambridge U.P., 1989), pp.15-57 等参照。なお、オーモンドを中心に考えて、この物語の結末に不満を述べる批評家も多い。Donald

A. Ringe, *Charles Brockden Brown: Revised Edition* (Boston: Twayne, 1991), p.43; Warfel, p.138 等。

- (18) ここで、この作品に繰り返し登場する「類似 (resemblance)」について述べておいてもいいだろう。例えば、Hare が、主要な女性登場人物四人—コンスタンシア、ソフィア、マーティネット、ヘレナー—is、同一人物の様々な側面を表している (Hare, p.178) と述べているが、登場人物間に「類似」があるという記述が多く目につく。これはオーモンドとコンスタンシアにも当てはめられ、「しかしコンスタンシアは二人の美德と義務の理屈に十分な類似があるのを見いだした (130)」とある。この辺りに、彼女になりかわって復讐する根拠を見いだすこともできるかもしれない。
- (19) それ故、Russo のように、薬屋をやっていた男の娘であるから、コンスタンシアが、実は毒殺したのだという大胆な推測も生じうる。(Russo, pp. 218-20.)
- (20) "Ormond pursues Constantia out of some dark need to symbolize in her violation his attempt over the female principle;" と Fiedler は述べている。(Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Penguin, 1984), p.102.)
- (21) オーモンドの "his super-male-chauvinism" を指摘した Hedges は、この文脈では的をえている (Hedges, p.117.)。
- (22) Marchand も "a completely rounded personality" への成長説をとっている (*Ormond*, p.xxx)。
- (23) Jan Lewis, "The Republican Wife: Virtue and Seduction in the Early Republic," *William and Mary Quarterly*, 44 (1987), p.689.
- (24) Kerber, pp.120-40.
- (25) Hare, pp.143-63; Nye, "Historical Essay," pp.281-7.
- (26) Cathy N. Davidson, "The Matter and Manner of Charles Brockden Brown's *Alcuin*," in Bernard Rosenthal, ed., *Critical Essays on Charles Brockden Brown* (Boston: G. K. Hall, 1981), p.82.
- (27) Witherington, pp.178-9.
- (28) 彼はブラウンが登場人物との距離がとれなくなり、「虚構の仮面」を「侵害」と感じだしたと述べているが、それは、彼が作者と語り手との距離を問題としているからだろう。私は、むしろ作者と主人公コンスタンシアとの距離で測らねばならないと考えている。
- (29) ここで *The Scarlet Letter* の例を持ち出してもいいだろう。Hester は、進歩的

な思想を口にはするが、その行動に関して言えば、最終的には当時の女性の枠を乗り越えてはいない。むしろ、作者が乗り越えるのを拒んだような印象がある。詳しくは拙論参照。(本合陽、『『女』があかす二人の作家』、岡山大学教養部紀要、第25号(1989.2)、87-97頁。)

- (30) Charles Brockden Brown, *Wieland, or The Transformation: An American Tale, and Memoirs of Carwin: The Biloquist* (Kent State University Press, 1977), p.225. なお、訳語は志村正雄訳(図書刊行会、昭和51年)を使わせていただいた。
- (31) 感傷小説には、普段女性には参加することのできない政治等に関する議論が持ち込まれていて、それを読むことで読者である女性が知識を得るという、教育的側面もあったらしいが(Davidson, *Revolution and the Word*, pp.123-5)、こういった考え方も私の説に味方してくれるだろう。
- (32) Clark, p.160.
- (33) フランク・カーモウド、「秘密と物語のシークエンス」、W. J. T. ミッチェル編、海老根宏他訳、『物語について』(東京：平凡社、1987)、143-4頁。
- (34) Fiedler, pp.103-4.
- (35) Clark, p.35.
- (36) Ibid., p.197.